

洛中洛外図の時代における京都周辺林

——「洛外図」の資料性の検討を中心にして——

小 椋 純 一

-
- | | |
|---|-------------------------------------|
| 1. はじめに | (2) 「洛外図」の森林描写とその資料性の検討 |
| 2. 洛中洛外図とその森林描写に関する一般的考察 | 5. 「洛外図」に見た京都周辺林 |
| 3. 「洛外図」について | 6. 「洛外図」とその他の洛中洛外図の森林描写における類似性とその意味 |
| 4. 「洛外図」の資料性の検討
(1) 森林以外の「洛外図」の資料性について | 7. おわりに |
-

1. はじめに

今日、約150万の人口をもつ古都・京都は、三方を山に囲まれ、また町の中の社寺や丘などにも森林が多いため、都市の大きさの割には豊かな緑を手近に感じられる町である。特に周辺の山なみは、手軽な散策やハイキングの場であると共に、町の背景であることによって、自然をより身近に感じさせる大きな要素となっている。それらの山々は高い所で標高900m前後。大部分は500mにも及ばない低い山なみである。照葉樹林帯から一部、落葉広葉樹林帯に属するその山々の大部分は今日、シイ・カンなどからなる照葉樹林をはじめ、アカマツ・コナラなどの二次林、またスギ・ヒノキの人工林などからなる豊かな森林で覆われている。

ところで、長い歴史の中で京都の町は様々な変化を見せてきたが、その周辺林はどのように姿を変えてきたのだろうか。そのことに関しては、一連の花粉分析の成果から、有史以前より今日に至る大まかな京都周辺林の植生の変遷を推測できるもの⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾の、花粉採取地点が限られることなどもあり、その成果だけからは、各時代の京都周辺林の景観を十分再現することは困難である。また、京都の文献資料は多いが、それらによって江戸時代以前の京都周辺の森林の様子を十分に把握することも容易ではない。たとえば、千葉徳爾氏は、12世紀から17世紀にかけての文献に現われるキノコから当時の京都周辺の林相を推測しておられる程⁽⁴⁾である。そして、千葉氏の研究と花粉分析

2. 洛中洛外図とその森林描写に関する一般的考察

の結果には相異なる点も見られる。

このように、京都の人々と決して無縁ではなかった筈の周辺林の歴史の変遷の実態はまだまだ十分に捉えられていないのが現状である。しかし、長い都市の歴史をもつ京都の資料としては、文献と共に多くの絵画が今日まで残されている。絵画はその資料性が十分に検討される必要はあるものの、そこには過去の事実が如実に伝えられている場合もある筈である。ここでは、そのような京都の絵画の中から、室町後期から江戸時代初期にかけて描かれた一連の洛中洛外図をとりあげ、当時の京都周辺林を考えてみる。

2. 洛中洛外図とその森林描写に関する一般的考察

町田家旧蔵の洛中洛外図（国立歴史民俗博物館蔵）は、室町後期の永永年間後期頃の京都の景観を描き、現存する最古の洛中洛外図と考えられている⁽⁵⁾。その後のものでは、室町最末期、永禄初年頃の制作といわれる上杉家本⁽⁶⁾や、江戸初期の元和初年頃の景観を描いた岡山美術館本や田万家旧蔵本（大阪市立美術館蔵）⁽⁷⁾など、数多くの洛中洛外図を今日見ることができる。典型的な洛中洛外図は、町田家旧蔵本などのように、京都とその郊外のほぼ全域にわたる名所や風俗などを描いた一対の屏風絵であるが、豊国臨時祭礼図（豊国神社蔵）のように、特定の場所の図であっても室町後期から江戸初期にかけての京都の内外を極彩色で描いた絵画は一般に洛中洛外図の範疇に含められることが多い。

そのような洛中洛外図には、ふつう多かれ少なかれ森林が描かれている。特に、それは社寺の周辺などでは一般的である。ただ、今日、豊かな森林で覆われている京都周辺の山々の大部分には、森林の描写をそれ程多く見ることができない。洛外の山々が広く金雲で隠れて見えないことも多いが、描かれている山々には、樹木が全く描かれていない部分が多く、樹木が描かれていても社寺周辺以外でうっそうとした様子の森林はほとんど見られない場合が多い。また一般に洛中洛外図の描写は名所や風俗が中心で、それらはこと細かに描かれているが、山々の描写はかなり大まかであるように見えるものが多い（図1）。

そんな洛中洛外図の森林描写から、かつての京都周辺林の状況を考えるのは決して容易ではなさそうである。山に樹木があまり見られないのは、実際に樹木が少なかったのか、それとも多くの樹木が生い茂っていてもそのように描かれているのだろうか。あるいは、描かれている木々は実際にその付近にあり、その樹形も正しく表現さ

れているのだろうか。これらの疑問は、その描写のみを見ることからなかなか解消されそうにない。ただ、数ある洛中洛外図の中には「洛外図」のように洛外のみを随分細かく描いたものもあり、同時期の文献の森林に関する記述との比較な



図1 洛中洛外図（岡山美術館本、部分）

どから、かつての京都周辺林の状況がかなり浮かび上がってくる場合もある。そして「洛外図」とその他の洛中洛外図の森林描写に関する類似性を見ることなどから、洛中洛外図が描かれた時代をとおしての京都周辺林をある程度推測することもできるように思われる。

3. 「洛外図」について

「洛外図」（中井基次氏蔵）は八曲一双の屏風で、それぞれ約127×480cmの大きさである（図2）。典型的な洛中洛外図とは異なり、洛中は全く描かれておらず、洛外のみが描かれている。その範囲は広く、左隻には南から北へかけて、上部には山崎付近から大原野、嵐山、梅尾、雲ヶ畑付近が、下部には石清水八幡から淀、桂を経て妙心寺、大徳寺付近まで、また右隻には同じく南から北にかけて、上部には宇治から山科、如意ヶ嶽、比叡山、大原付近が、下部には巨椋池付近から、伏見、祇園、下鴨、上賀茂付近が描かれ、洛外の様子をつぶさに見ることができる。画中には極めて多くの書き入れが見られ、地図的な性格も大きいものと思われる。また人物が全く描かれていないことも、この図の特徴の一つである。

「洛外図」の景観年代は、後の万福寺の位置に「隠元寺地」との書き入れがあることから、隠元が宇治大和田の地を幕府から寄せられた万治2年（1659）から、法堂が竣工した寛文3年（1663）までのものと考えられている（図3）。ただ、この年代は以下、本稿において重要であるため、ここでさらに若干の検証をしておきたい。まず、「洛外図」に見える遅い時代の建物の一つとして曼殊院があるが、かつて竹内門跡と称されたその寺が現在の地に移ったのが明暦2年（1656）である（図4）。また妙心

3. 「洛外図」について



図2 洛外図（部分）

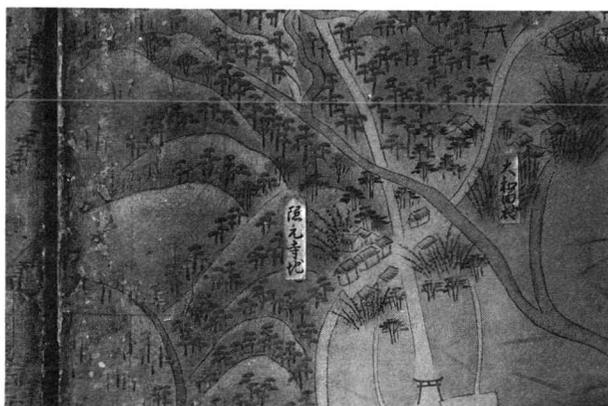


図3 洛外図（隠元寺地付近）

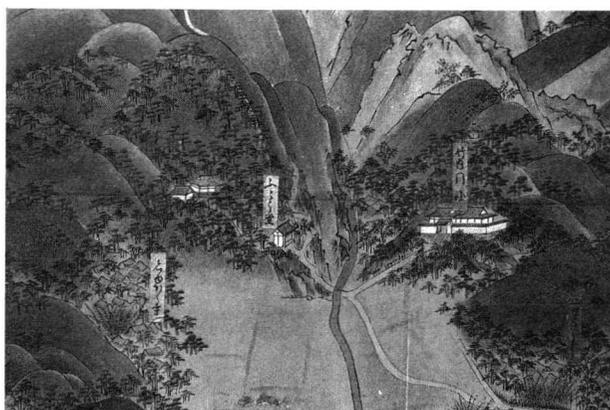


図4 洛外図（修学寺から一乗寺付近）

寺の法堂が建てられたのが翌明暦3年（1657）である。「洛外図」にはそれらの描写が見られることから明暦3年（1657）に妙心寺法堂が竣工した後の景観が描かれていると見ることができる。これは「隠元寺地」の書き入れから考えられる年代と矛盾しない。そして、「隠元寺地」の書き入れの重要性を再確認できる。そこで次に万福寺ができる過程をもう少し詳しく見てみたい。隠元が正式に新寺建立の上旨を受けたのが、万治2年（1659）6月で、それによって宇治大和田の地を寺地として幕府に希望している。その後、寺地決定の令旨を受けたのが同年11月、翌万治3年（1660）12月に実際に寺地の引き渡しを受け、新寺を黄檗山万福寺としている。そして翌寛文元年（1161）5月には黄檗山万福寺が正式に開創され、その年の8月には総門や西方丈などのいくつ

かの建物もでき、隠元が晋山している。寛文2年(1662)には法堂なども完成し、翌寛文3年(1663)1月の盛大な祝国開堂に至っている⁶⁹。このような万福寺創建の経過と、「洛外図」の描写がしばしば社寺などの建物の形や配置さえも十分わかる程細かいことを考え合わせると、全く何ら建物も見られない所に「隠元寺地」の書き入れがあることは、「洛外図」の書き入れが、寺地決定の令旨を受けた万治2年(1659)末から万福寺が開創される寛文元年(1661)5月、あるいは遅くとも隠元が晋山した8月までの間に行なわれた可能性が強いものと考えられる。

ここで一つ気になるのは万治2年(1659)3月に完成した修学院離宮が「洛外図」には描かれていないことである(図4)。しかし、寛文2年(1662)刊の新板平安城東西南北町並洛外之図にも離宮は見えず、元禄9年(1696)刊の京大絵図にも、今日その一部が中御茶屋となっている林丘寺の書き入れはあるが、離宮を示す御茶屋の文字は見えないなど、離宮完成後もしばらく地図上に現われていないことから、同離宮の存在は初期の頃一般にはあまり知られていなかった可能性もうかがえる。ただ、上記の新板平安城東西南北町並洛外之図には、既に開創されている万福寺の文字も見えないことから、「洛外図」にまだ寺もないのに「隠元寺地」とあり、一方で既に完成していたと思われる修学院離宮が見えないのは、図がかなり幕府よりのものであるためとも考えられる。また、同離宮が「洛外図」に描かれていない理由の別の可能性として、図の景観は離宮完成の万治2年(1659)3月より前、妙心寺法堂が完成した明暦3年(1657)以後を示し、図の完成段階での書き入れが前述の万治2年(1659)末から寛文元年(1661)8月までの間に行なわれたと考えることもできる。いずれにせよ、「洛外図」が万治3年(1660)前後のわずかの期間のものであることは間違いなさそうである。

4. 「洛外図」の資料性の検討

(1) 森林以外の「洛外図」の資料性について

本稿の主題は森林についてであるが、「洛外図」の資料性を考えるにあたって、森林以外の面における「洛外図」の資料性について若干の検討をしておきたい。

「洛外図」は絵画的表現で描かれてはいるものの、山や河川、道路、社寺、集落等の名の書き入れや位置関係は、今日の状況や他の古地図などと比較しても概して正しく描かれていることがわかる。ことに、道路や河川の描写の細かさもさることながら、社寺などでは主な建物の形状や配置さえも読み取れる場合が多く、しかもその描写は

4. 「洛外図」の資料性の検討

今日の状況などから考えてもほぼ正しいことがわかる。このようなことは、「洛外図」がその制作にかなりの時間を要したであろうことを推測させると共に、その図の資料的価値の大きさを示している。

しかし、「洛外図」にはいくつかの問題点も見られる。その一つに、今日の円通寺の前身である後水尾上皇の幡枝離宮は、「洛外図」中には仙洞様御茶屋と記されているが、その位置関係は現在の円通寺の場所とは少し異なり、建物が移転していないという一般的な説と矛盾することなど、若干の描写に関する問題点を指摘することができる。また図中の書き入れに関しては、嵯峨野の広沢の池が伏見城跡となっていたり、如意ヶ嶽西南の鹿ヶ谷に白川村の文字が見られる(図25)など、明らかに間違った書き入れがいくつか見られる。ただ、“書き入れ”は別の短冊に書いたものを貼りつけたものであり、誤りの多くはその短冊が剥がれ落ちたものを再び貼りつけた時生じたものと考えられる。

以上のようないくつかの問題点は見られるものの、それらは「洛外図」のほんの一部であり、全体的に見れば「洛外図」は当時の洛外の様々な状況を知ることのできる極めて貴重な資料であると考えることができる。

(2) 「洛外図」の森林描写とその資料性の検討

a) その方法

17世紀中頃の洛外の景観を考える上で、「洛外図」は一般に貴重な資料と考えられるが、その森林描写はどの程度正確に行なわれているのだろうか。そして「洛外図」の描写から当時の京都周辺林の状況をどれ位知ることができるのだろうか。そのことを考えるには「洛外図」のみを見るのでは困難である。しかし、「洛外図」と同時期の他の文献や絵画との比較、また今日の山々の状況との比較をとおして、「洛外図」の森林描写に関する資料性をある程度述べることもできるものと考えられる。ここでは、そのように大きく二種類の比較検討により「洛外図」の資料性を明らかにしてゆきたい。

なお、「洛外図」にはその描写から明らかに松や竹や桜などとわかる植物表現が見られる。松は現在の植生などから考えると、ほぼアカマツと考えられるし、竹はまだモウソウチクが日本へ入っていない時代なので、マダケかハチクであろうと考えられるなど、その植物の種が推測できるものもあるが、「洛外図」の描写だけからではその植物の種までを断定することは一般には難しい。例えば、図中でスギかと思われる木は、実際はヒノキかもしれないし、あるいはもっと別の針葉樹を表わしている場合も

あるかもしれない。そこで、以下において「洛外図」中の植物表現について述べる時、例えばスギのように描かれている木は「杉」タイプの木とする。図中でこのようなタイプをはっきりと述べることのできる樹木は「松」タイプ、「梅」タイプ、「桜」タイプ、「杉」タイプ、「楓」タイプ、「柳」タイプである。また、正しくは“木”ではないが「竹」タイプの林も数多く図中に見ることができる。



図5 京童（大原）

b) 文献，絵画との比較からの考察
「洛外図」に描かれている樹木は、その位置や数や種類において、どれ程正確に表現されているだろうか。

そのことを考えるには、他の資料との比較が不可欠であるが、そのような資料となりうると思われるものに、「洛外図」とほとんど同じ頃発行された2冊の京の名所案内記がある。それらは、中川喜雲著の「京童」と山本泰順著の「洛陽名所集」

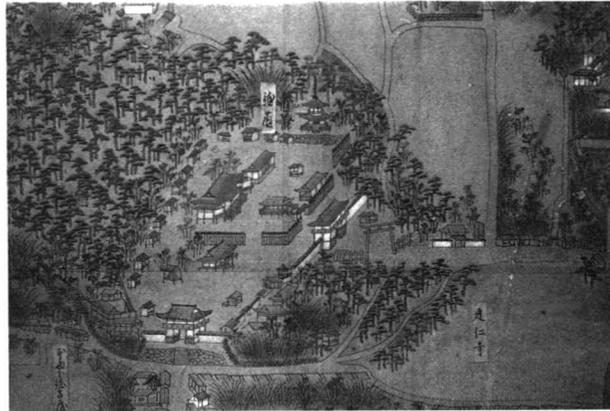


図6 洛外図（祇園付近）

で、共に明暦4年（万治元年・1658）の刊⁽¹³⁾である。両書共、名所とその周辺についての記述の他に挿図もあり、特に「京童」にはその数が多い。そして、そのことによって両書に初期の名所図会的性格をも見ることができる。ただ「京童」の挿図は極めて大まかで、その描写から当時の名所付近の植生について考えることは難しそうである（図5）。また「洛陽名所集」の挿図についても、当時の森林を考えるのに十分詳しく描かれているとは思われないが、「京童」の描写に比べるとはるかに写実的であり、ある程度の資料となりうるようにも見える。ここでは、そのような「洛陽名所集」の

4. 「洛外図」の資料性の検討

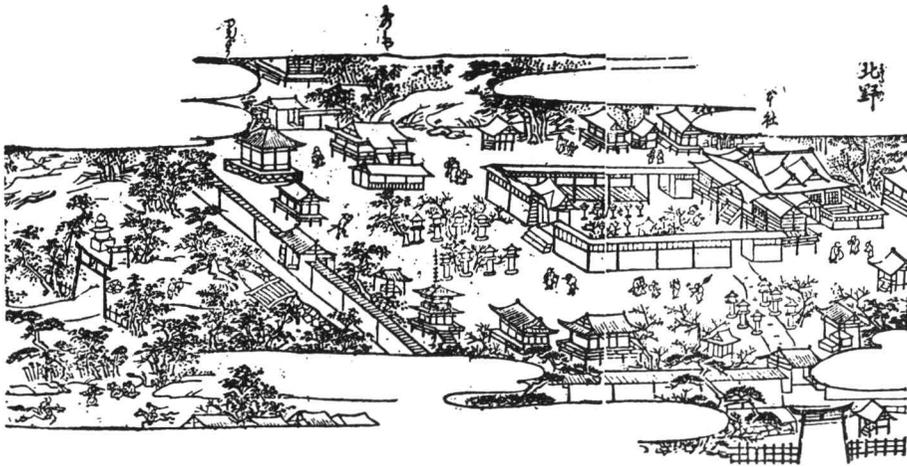


図7 洛陽名所集（北野）

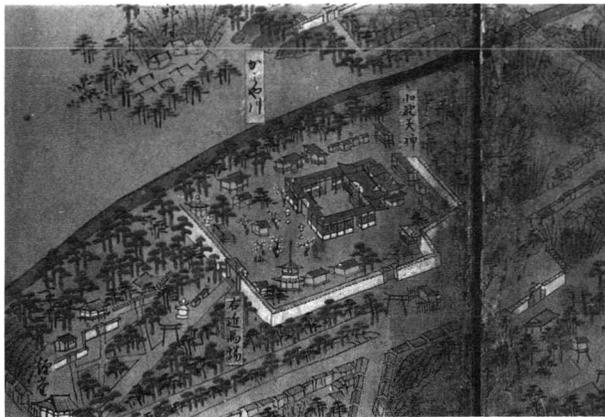


図8 洛外図（北野天神付近）

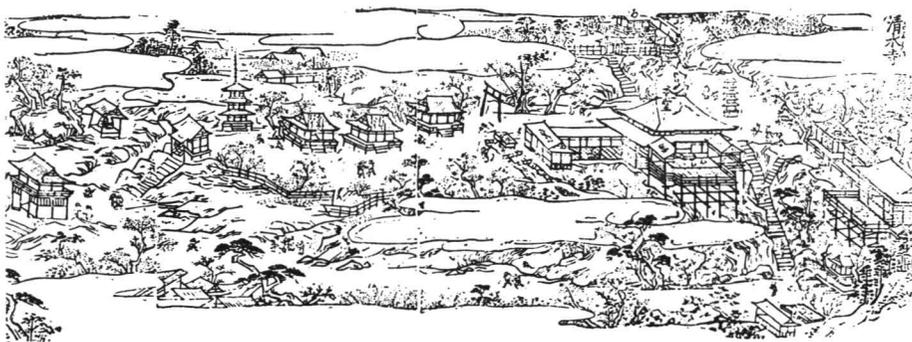


図9 洛陽名所集（清水寺）

挿図も参考にすが、主として二つの名所案内に記された樹木についての記述と「洛外図」の描写との比較検討により、社寺に代表される名所付近の植生を中心にした「洛外図」の資料性を考えてみたい。

(i) 祇園

「京童」や「洛陽名所集」にはいくつかの名所付近の樹木についての記述が見られる。祇園⁰⁴については「洛陽名所集」巻之三に、『…鳥井に感神院と云額かゝれり…(中略)…其ほとりの風光見るたびに、めづらしく、ただ松のみ生たる林なるに…』とあり、また「京童」にも巻第一の双林寺の項に、筆者のものと思われる『松と花と祇園に双ぶ林哉』の句があることから、祇園のあたりに松林があったことがわかる。また、桜の木も多くあったこともうかがえる。

そこで「洛外図」の祇園付近を見ると、神社の周囲に広く「松」タイプの林を見ることができ(図6)。また、神社の内側などには、タイプは特定できないものの、桜の可能性もあると思われる広葉樹もいづらか見ることができ。ただ、はっきりと「桜」タイプと認識できる林は見られない。

(ii) 北野天神

次に、北野天神の項では「京童」巻第三に『…大内の北野に一夜に千本の松生たり。比所に御社をたて…』とか、『ふねの宮と申は一夜に生えたる千本松をいはえり』というような千本松についての記述があり、また『梅とにほへ丁子がしらの万灯会』という梅を季語とした俳諧もある。また、「洛陽名所集」巻之九にも千本松の記述や『こちふかば…』の歌など梅にまつわる話も記されている。これらの記述は直接的表現ではないものの、当時も境内には多くの梅が見られ、また松の木も数多くあったことが想像される。ちなみに「洛陽名所集」の挿図にも「梅」タイプの木が境内に多く見られ、「松」タイプの木も割合多く見ることができ(図7)。

一方、「洛外図」の北野天神の部分にも「梅」タイプの木が数本描かれ、「松」タイプの林は神社の周囲に広く見ることができ(図8)。

(iii) 清水寺

また清水寺については、「洛陽名所集」巻之四に、『…ことに春も三月の頃なればにや、猶しも、桜木のほとりせばしとうちかこみ、花さき一入にかほりて…』とあり、挿図にも桜と見られる木々が多く描かれている(図9)。

一方、「洛外図」の清水寺の部分にも多くの「桜」タイプの樹木が見られる(図10)。

(iv) 通天橋

4. 「洛外図」の資料性の検討



図10 洛外図(清水寺付近)



図11 洛外図(東福寺通天橋付近)



図12 宇治黄檗図(部分)

東福寺の通天橋は「京童」巻第四に『…当寺通天のもみぢは名たかし…』との記述や、『くれなゐの雲は通天のもみぢ哉』の句もあるように、当時から紅葉の名所であったことがわかる。

一方「洛外図」には、「松」タイプとは異なる広葉樹と見られる樹木がいくらか通天橋の付近に描かれているが、それは明らかにもみじとわかる表現ではない(図11)。

以上(i)~(iv)に示したように、「京童」や「洛陽名所集」の樹木に関する記述と「洛外図」の描写には一般に一致点が多い。ただ、明らかな矛盾と言うことはできないが祇園の桜や通天橋のもみじのように、「洛外図」にはっきりとそれとわかる表現で描かれていない場合もある。また桜については、他にもいくつかの記述があるが、「洛外図」中にそれと見えない場合が多く、それは木の

数が多くないための省略である可能性も大きいと思われる。このようなことから、名所付近について「洛外図」は、その描写から単木や少数の木の存在まで認識することは難しいものの、おおよその林相については読み取ることができる資料である可能性を見ることができる。

そのような「洛外図」の資料性は、「宇治黄檗図」¹⁰⁹との比較においても見ることができる。「宇治黄檗図」は六曲一双の屏風で、右隻には平等院や興聖寺などが、左隻には万福寺や茶摘みの風景などが描かれている。景観年代は寛文9年（1669）建立の万福寺の伽藍堂や祖師堂は見えるものの、祠堂（延宝2年・1674）

や開山堂（延宝3年・1675）など、その後完成した建物が見られないことから、寛文末期（1670年代初期）の頃と推測できる。そして、「洛外図」から10年前後を経て描かれたと考えられる「宇治黄檗図」であるが、特に右隻の平等院から興聖寺

付近の部分に見られる樹木の描写は、「洛外図」のそれによく似ている（図12, 13）。すなわち、宇治川と平等院の間には「松」タイプの樹木のみからなる林が見られ、図上方の興聖寺参道付近には「桜」タイプの木が見られ、またその右手の山の下部付近には「松」タイプの疎林が共に描かれている。「洛外図」の興聖寺への参道の左手に見える「杉」タイプの樹木は、金雲に隠れてか「宇治黄檗図」には見えないなど、両図にはいくらかの違いもあるが、大まかな樹木や林の描写に多くの共通点を見ることができる。



図13 洛外図（平等院付近）



図14 洛外図（上賀茂神社付近）

4. 「洛外図」の資料性の検討

また、日本林制史資料からは「洛外図」完成後間もない頃の上賀茂神社周辺には松林が多く、また松の他に杉と檜も保護されていたことがわかるが、それは「洛外図」の上賀茂神社周辺の描写に見られる森林の景観と矛盾しない(図14)。

一方、「洛外図」に見られる竹林の分布と江戸後期の京都の竹林分布が極めてよく似ていることは、「洛外図」の森林描写の正確さが単に名所周辺に限らない可能性も十分ありうることを示しているように思われる。

これらのことから、特に名所周辺においては「洛外図」の描写は単木や少数の樹木を読み取るには不十分でも、まとまった林の分布や樹種を考えるには重要な資料であると考えられる場合が多いことがわかる。

c) 今日の山々の状況との比較からの考察

「洛外図」と文献や絵画との比較では、社寺を中心とした名所付近以外の「洛外図」の森林に関する資料性を十分明らかにすることはできなかったが、広く京都を囲む山々などにはどのような森林が見られたのだろうか。そのことを考える手がかりとして、「洛外図」の山々にはいくつかの特徴的な描写を見ることができる。それらは城跡や岩や滝であるがその描写と今日の状況を比較検討することで当時の山々の植生の様子が次第に浮かび上がってくる。

(i) 城跡

「洛外図」から、その頃の山々の景観を読み取る一つの手がかりとして、洛外の丘陵や山地に残された城跡がある。「洛外図」には城跡とはっきりわかるものとして、伏見城跡と北白川城跡が描かれている。共にその場所に見られる書き入れやその位置関係などから、それらが城跡であることは明白である。また同様な描写は天王山のふもとにも見られる。

まず、伏見城跡についてであるが、豊臣秀吉によって作られた伏見城は元和9年(1623)、家光の將軍宣下を最後に廢城となり⁰⁹、その城跡は「洛外図」には図15のように描かれている。そこには「松」タイプや「竹」タイプの林もいくらか見られるが、特に注目されるのは、数多く見られる段状の地形である。このような地形が遠方から見えたことは、「洛陽名所集」卷之五の伏見の項の挿図(図16)や『…されば今も家居など、もとのかたのこりて、やさしう見え侍るに、主しらぬとほそあれはてて、蘚草しげみぬるも有けり……』との記述からもうかがうことができる。一方、今日その地を訪れると、スギやヒノキの人工林や高木の雑木林でその大部分が覆われているため、そのような林に入らない限り、城跡である段状の地形を確認することはできない

(写真1)。そして、丘陵に広がる伏見城跡地は当時、高木の樹木は少なく、その大部分は低い植生の草原か、あるいは裸地のような場所であった可能性が高いことがわかる。

次に、規模は伏見城跡に比べると小さいものの、同様な描かれ方をしている北白川城跡(図17)について考えてみる。北白川城は、比叡山に近い東山三十六峰の一つである瓜生山の頂上付近一帯にあった中世の山城で、元亀元年(1570)に明智光秀が浅井、朝倉軍との戦いで滞在したのが最後とされるもので、別名勝軍山城とも瓜生山城とも呼ばれている。瓜生山頂には「洛外図」の頃、勝軍地蔵があったが、「洛外図」にもその付近に將軍地蔵の字を見ることがもできる。図中、將軍地蔵(勝軍地蔵)の部分には多くの樹木を見ることができが、その下部には伏見城跡と同様

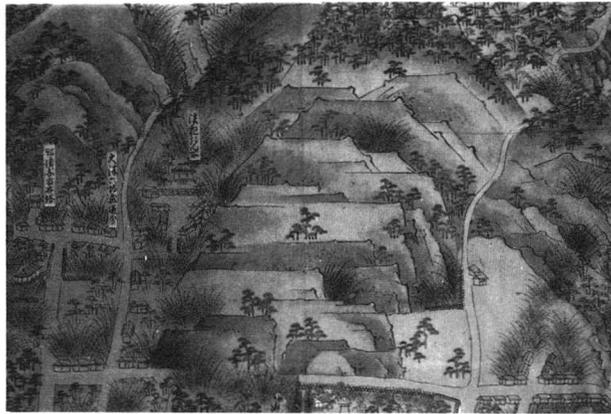


図15 洛外図(伏見城跡付近)



図16 洛陽名所集(伏見)



写真1 伏見城跡の一部

4. 「洛外図」の資料性の検討



図17 洛外図 (將軍地蔵付近)



写真2 北白川城跡付近

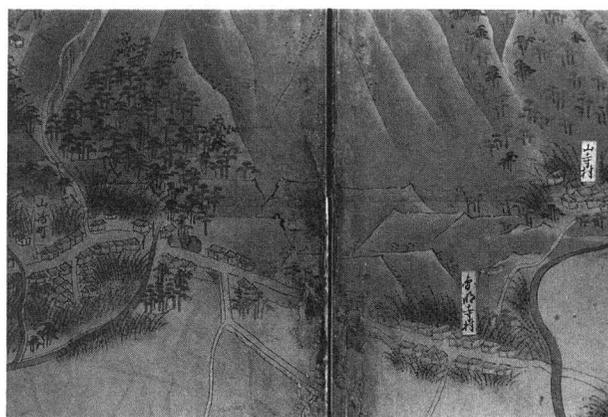


図18 洛外図 (天王山東麓付近)

な段状の地形を見ることが
 ができる。またその後方
 には樹木は全く見えず、
 ごつごつとした山肌の描
 写が見られる。今も、そ
 の城跡付近にはトリデ
 山、ヤカタ山、デマルな
 どの地名が残り、人工的
 に作られた平地が数多く
 見られる。ただ、ここも
 伏見城跡のように、今は
 アカマツやコナラなどの
 木々ですっかりと隠れて
 いるため、林内に入らな
 ければ、そこにいくつも
 の平地があることはわか
 らない(写真2)。そし
 て図のように城跡が描か
 れるには、遠方からも実
 際にそのように見えてい
 た可能性が高いことを考
 えると、「洛外図」の頃、
 北白川城跡付近にも高木
 の樹木が少なかったもの
 と思われる。

最後に、城跡かどうか
 は不明であるか、天王山
 の東麓、山崎と山寺と円
 明寺の集落に囲まれた地
 域に、前述の城跡と同様
 な描写を「洛外図」に見
 ることができる(図18)。

この付近は現在、市街化が進みつつある所であるが、明治中期の仮製地図では図19のように、鉄道は新しく見えるものの、道や集落の状況は「洛外図」の頃と大きく変わっていない様子がうかがえる。そして「洛外図」で城跡のように描かれている部分は、明治中期には主に竹林や水田であった部分と思われる。今日、そこには拡がりつつある宅地と共に、竹林や農地もまだ広く見られる（写真3）。その竹林の中を歩いてみると、きれいに整地されたと思われる平地をいくつも見る事ができ、かつて何かがあったことが想像される。それが何であったかはわからないが、かつて秀吉も本拠としたことのある天王山頂の山崎城に関連した住居等の跡であることも考えられる。いずれにせよ、そこに何かがあった可能性は大きく、その跡が図18のように速くから見えていたならば、その

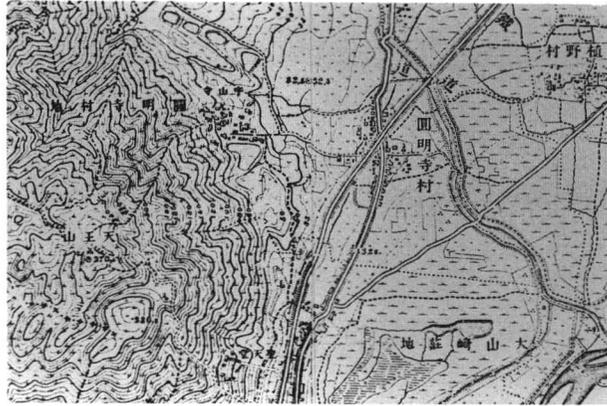


図19 明治中期の仮製地図（天王山東麓付近）



写真3 天王山東麓の竹林と農地



図20 洛外図（清滝川上流付近）

4. 「洛外図」の資料性の検討



図21 洛外図（江文山付近）

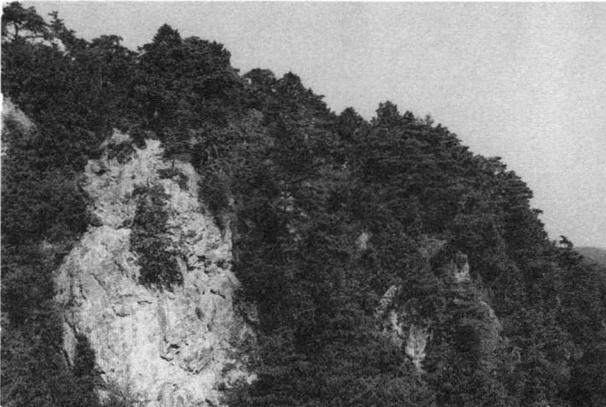


写真4 金毘羅山の岩場の一部



写真5 大原より見た金毘羅山

地の大部分の植生は低いものだったと考えられる。

このような城跡、あるいは類似の場所の「洛外図」の描写と今日の状況を比較することで、かつてその付近には高木は少なく、全般に植生は低かったことがわかる。しかも、伏見城跡のように数多くの段が描かれるためには、2～3m程度の段も描かれていると思われる。そのような段が遠方から識別できたとすれば、その植生は草本程度の高さであったと思われる。あるいは、植生自体が少なかったのかもしれない。

(ii) 岩

「洛外図」に描かれた城跡付近の植生は全般に低かったと考えられるが、それは城跡が特別な地域であったからなのだろうか。ここでは次に「洛外図」に描かれた岩の描写からもう少し一般的な山々の景観を考えてみたい。

「洛外図」には清滝川上流の天狗岩（図20）のような岩の描写が数多く見られるが、かつて江文山と呼ばれた大原の金毘羅山はひときわ大きな岩山として描かれている（図21）。金毘羅山は今は、ロッククライミングのゲレンデとして使われているような岩山で、実際に山に登ればその様子がよくわかる場所もある（写真4）が、岩壁のわずかなすき間に根を張るヒノキやアカマツなどの樹木によって大部分が覆われているため、今日、金毘羅山が岩山であることは遠方から眺めるのではよくわからない（写真5）。このような現状から考えると「洛外図」にかつて見えなかった岩山が描かれていると考えるのは不自然であり、金毘羅山（江文山）は当時、「洛外図」に描かれているように、実際に樹木の少ない岩山として、ふもとの大原の里からも見えていたものと考えられる。ま



図22 洛外図（岩屋不動付近）



図23 洛外図（きつね坂付近）



写真6 きつね坂と巨岩

4. 「洛外図」の資料性の検討



図24 洛外図（氷室山付近）



写真7 氷室山北端部



図25 洛外図（如意ヶ嶽付近）

た、同様なことは洛北雲ヶ畑の岩屋不動周辺の山々についても言える（図22）。

一方、岩山という程大きくはない岩についてであるが、例えば「洛外図」の松ヶ崎から岩倉へ至る途中のきつね坂の少し上方に大きな岩を見ることができる（図23）。

そして、今日もその付近には実際に大きな岩がある（写真6）。また「洛外図」には修学寺の村の下方に描かれた氷室山の左下方（北西）に岩が描かれている（図24）が、今日も同じ所に大きな岩を見ることができる（写真7）。ただこの岩は今はかなり樹木にかくれているため、その岩の存在に気づく人は少ないようである。きつね坂の岩のように今日でもすぐ目につくものは例外で、ほとんどの岩はこのように林に隠れて遠方から見にくい事が一般的である。

たとえば、如意ヶ嶽西南斜面の岩（図25）や鷹

ケ峰付近の山々の岩（図26）などもそのような岩である。特に鷹ヶ峰の山々には今日でも大きな岩がしばしば見られるが、それらは林の中にあつて、遠くから見ることはできない。そして、このように「洛外図」に岩が描かれている場所には今日も実際に岩が見られ、一方それらの岩の大部分は林の中にあつて遠方からは確認できないということは、「洛外図」の岩の描写がかなり正確に行なわれていることを示すと同時に、当時は今日よりも山々に多くの岩が見えた——すなわち、低い植生の山々が多かったことを示しているものと考えられる。

(iii) 滝

城跡や岩と共に、「洛外図」に描かれている滝も当時の山の景観を考える手がかりになるものと思われる。「洛外図」にはいくつかの滝が描かれているが、如意ヶ嶽の南側の山の中腹にも大きな



図26 洛外図（鷹ヶ峰付近）



写真8 駒ヶ滝



図27 洛外図（戸無瀬の滝付近）

5. 「洛外図」に見た京都周辺林

滝が描かれている(図25)。この滝はかつて、駒が滝とか楼門の滝とか如意ヶ滝というふうに様々に呼ばれていたようである。なお、「洛外図」中の“にょいかたけ”の書き入れは，“にょいかたき”との間違いと思われる。滝の水は普通少量で、特別大きな滝ではないため(写真8)、その存在を知る人は今日多くない。周囲には大きな樹木が茂っているため、下の市街地からその滝は全く見ることはできない。ただ滝の付近からは、木々の間からわずかに吉田山や百万遍方面の市街地も垣間見ることができることから、もし滝の周辺に樹木がなければ、下からも岩場の多い滝の存在が認められるものと思われる。一方、「洛陽名所集」巻之二には駒が滝について『…雨の後にはかならず流れをまし、ちかづきがたしとなむ。遠所よりは山半分にも見え侍りぬ』との記述が見られる。ふだんは水量も少なく、まとまった落差はなくても、大雨が降れば、20m以上もの大きな滝となるであろうことは、今日の状況からも容易に推測できる。その様子が遠方から山半分程にもよく見え、京の名所案内にも記されていることは、当時は滝のまわりに大きな樹木が少なかったことを裏付けている。

また、嵐山の戸無瀬の滝についても同様なことが言える。「洛外図」では図27のように見える滝は、「洛陽名所集」巻之十一にも戸難瀬滝として大きく取り上げられており、当時はかなりの名所であったと思われる。しかし今日では林の中に隠れ、観光地嵐山にありながら近くの川添いの歩道にも滝についての案内板もなく、滝を見過ごしてしまう人も多いようである。

以上(i)~(iii)の考察から、「洛外図」が描かれた頃の京都周辺の山々には、今日とは異なり広範囲にわたって高木の林の見られない部分があったことが考えられる。しかも岩の位置の描写の正確さとともに、地肌がむき出しの荒廢地のように描かれている部分が、他の緑の部分とは異って岩や崖と同様に薄茶色で描かれている⁽²⁾ことから考えると、北白川城跡の後方の山(図17)のように、ごつごつとして岩や崖に近い描写の場所は、実際に樹木がなく、しかも草さえ見られないような裸地化した山であった可能性が大きいものと思われる。

5. 「洛外図」に見た京都周辺林

これまでの考察から、「洛外図」の森林描写に関する資料性がある程度明らかになってきたものと考えられる。すなわち、「洛外図」に描かれている林は、かつて実際にその場所にあり、またそのおおよその樹種構成も割合正しく描かれている可能性が

高い。そして、そのことは社寺を中心とする名所周辺においては特に言えるものと思われる。また樹木の描かれていない山々の部分は、森林描写が省略された部分もあるであろうが、城跡や岩などの描写や名所付近の森林描写の正確さなどから考えると、実際にそこには目立った森林はなかった可能性が大きいものと考えられる。このような資料性を踏まえながら「洛外図」を見ることにより、以下のような、万治年間（1658～1661）頃の京都周辺林の状況を考えることができる。

豊かな森林で覆われた山々に囲まれている京都では、今日、山という言葉は森林と深く結びついた意味で使われることが多いが、「洛外図」の頃は洛外の山々にはどこにでも森林が見られるというような状況ではなかった。山々には広く森林の見られる部分もあったが、特にまとまった森林

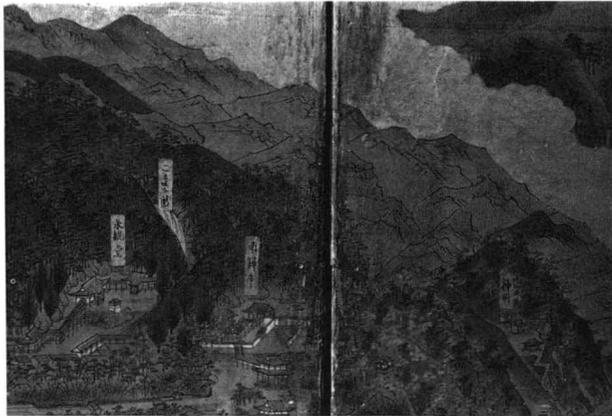


図28 洛外図（南禅寺裏山付近）



図29 洛外図（桂付近）

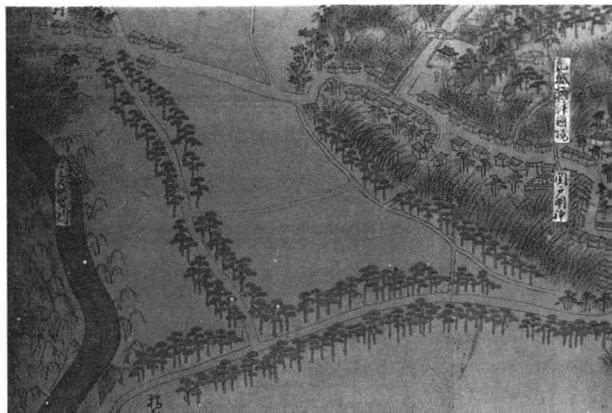


図30 洛外図（山崎から水無瀬川付近）

6. 「洛外図」とその他の洛中洛外図の森林描写における類似性とその意味

は社寺などの周辺に多かった。知恩院から伏見稲荷の裏山付近にかけての東山には特に連続した森林が広範囲に見られたものと思われる。そのような林は松が主体の林であったが、社寺のすぐ近くには、杉などの針葉樹や様々な広葉樹や竹の林もしばしば見られた(図28)。一方、山々には高木の樹木のない所も多く、草地か極めて低い樹木が茂っていたと思われる部分も多かった。「洛外図」に岩が多く描かれている鷹ヶ峰付近の山々などは明らかにそのような低い植生だったものと思われる(図26)。また、草木もほとんどないはげ山のような所もかなりあったものと考えられる。中でも北白川城跡付近から南禅寺の背後の山々にかけての山なみには相当広範囲にかけて裸地化した部分が存在したようである(図17, 25, 28)。

丘陵山地以外の洛外の平地にも当時様々な林を見ることができた。社寺の林は下鴨神社や北野天神(図8)などのように平地でも一般的であった。そのような社寺周辺には竹林もしばしば見られたが、竹林は農村集落の周辺にはほとんどどこにもあり(図29)、街道沿いの民家の裏などにもしばしば見られるなど、人々の生活と深く結びついた林であったことがうかがわれる。また、道沿いには竹の他に、松や杉などの並木の見られる所もあったようである(図30)。

このように、今日とは大きく異なる京都周辺林の状況を「洛外図」に見ることができる。

6. 「洛外図」とその他の洛中洛外図の 森林描写における類似性とその意味

洛中洛外図に見られる森林の描写のみから、かつての京都周辺林を考えるのは一般に難しいことは先に述べたとおりであるが、それらの森林の描写には共通性が見られる部分がある。ここでは、その資料性がある程度明らかになった「洛外図」とその他の洛中洛外図に共通して見られるいくつかの点から、洛中洛外図が描かれた時代をとおしての京都周辺林について少し考えてみたい。

まず、現存する最古の洛中洛外図と考えられている町田家旧蔵本(国立歴史民俗博物館蔵)についてであるが、その中にはとりわけ多くの「洛外図」との類似性を見ることができる。すなわち、松の多い祇園や北野天神付近の林の景観をはじめ、一般に神社の周辺には何らかの林があり、そこには松の木以外にも杉や桜などの様々な樹木もしばしば見られる。また、社寺周辺以外の山々には樹木はわずかし描かれておらず、山に見える樹木の大部分は松である。如意ヶ嶽の中腹には「洛外図」と同様に滝

も見られ(図31),川岸の岩とよく似た表現で描かれている山の部分も見られる(図31, 32)。また家の周囲などには竹林も多く描かれ,松の並木も一部に見える(図31)。このように,町田家旧蔵本には「洛外図」との類似性を数多く見ることができる。そして,そのことは「洛外図」より130年余り古いと考えられる町田家旧蔵本の頃,「洛外図」に見られるような京都周辺の山地や森林の景観が既に現出していた可能性が高いことを示唆しているのではないだろうか。

町田家旧蔵本で見た「洛外図」との描写の類

似性は,上杉家本や田万家旧蔵本(大阪市立美術館蔵)など多くの洛中洛外図に大なり小なり見ることができるものである。そのような洛中洛外図の類似性は,それらの図が描かれた時代をとおして,同様な森林景観が京都周辺に見られた可能性が強いことを意味しているように思われる。

7. おわりに

石炭や石油の時代の始まる前,緑は生活全般にわたって極めて重要であった。樹木が用材や燃料として欠くことのできなかったことは言うまでもない。そして当時の人々ほどの木が建材によく,どの木が燃料によいというようなことは,今日の我々より



図31 洛中洛外図町田家本(部分)



図32 洛中洛外図町田家本(部分)

7. おわりに

はるかによく知っていたことであろう。「洛外図」の森林分布や樹種が比較的正確に描かれている可能性が大きいことは、そのようなこととも関係があるものと思われる。また田畑の肥料や家畜の餌、あるいは屋根を葺く材料としての草も農村では特に大切なものであった。そのため林地と共に広い草地が近くにあることは、かつての農村では一般的なことであった。そして、江戸時代をとおして約40万人の人口であったという京都の周辺の山々は林地としてあるいは草地として古くから人為的影響が特に大きかったことは想像に難くない。洛中洛外図にはそのような京都周辺の山々が描かれている。そこには、はげ山さえも現われ、松くらの樹木しか育たない瘠せた林地が広がっていたようである。そして、それは江戸時代後期の名所図会からも読みとれる景観でもある。

石油文明の今日、京都周辺林の景観は一変した。市街地の拡大により、農地を中心にした緑地の減少が見られる一方、山々にはとても豊かな森林が広く育ちつつある。そして、そのような光景は日本の都市周辺ではどこでもよく見かけられることである。緑の危機と豊かな緑が隣合わせのこの日本で、今日的な緑の問題、あるいは、広く環境の問題を考える時、かつての京都周辺林の景観が意味するものを私達は十分認識しておく必要があるように思われる。

最後に、この報告をまとめるに際して、貴重な屏風を拝見することを快く許していただいた中井基次氏をはじめ、多くの方々にたいへんお世話になった。ここに深く謝意を申し上げなければならない。なお本稿は昭和59年度文部省科学研究助成費（奨励研究A）「都市周辺林の歴史的変遷に関する研究」の研究成果の一部であることをつけ加えておく。

註

- (1) 深泥池団体研究グループ、深泥池の研究(1), (2) 地球科学30, 1976, p 15~38, 122~140
- (2) 中堀謙二、深泥池の花粉分析、深泥池学術調査団編、深泥池の自然と人, 1981, p 163~180
- (3) 中堀謙二、京都大学構内遺跡の花粉分析、京都大学構内遺跡調査研究年報, 1978
以上(1)~(3)の他にもいくつかの報告がある。
- (4) 千葉徳爾、はげ山の文化、学生社, 1973, p 67~73
- (5) 武田恒夫編、日本屏風絵集成第11巻、講談社, 1978, p 69
- (6) 同上, p 69
- (7) 京都府立総合資料館編、洛中洛外図の世界, 1983, p 80
- (8) 前掲5), p 106
- (9) 京都市編、京都の歴史第5巻, 1972, p 228
- (10) 同上, p 225

- (11) 安部禪梁他, 古寺巡礼京都9, 淡交社, 1977, p 89~91, 147~148
- (12) 前掲9), p 185
- (13) 「洛陽名所集」には数版あるが, 初版が万治元年(1658)であったことは, 増補京都叢書(1933)の解題にも述べられている。
- (14) ここでの祇園とは, 祇園社, すなわち今日の八坂神社のことである。
- (15) この屏風は現在アメリカへ渡り, 日本では見ることはできない。写真は角川書店から提供していただいたものである。
- (16) 前掲11), p 148~149
- (17) 農林省編, 日本林制史資料, 臨川書店, 1971, 賀茂別雷神社領 p 10~23
- (18) 拙稿, 京都における江戸後期の竹林分布に関する一考察, Bamboo Journal No. 1, 1983, p 4~10
- (19) 日本城郭大系Ⅱ, 新人物往来社, 1980, p 59
- (20) 同上, p 52
- (21) 上山春平, 城と国家, 小学館, 1981, p 100~102
- (22) 江戸時代図誌2 京都二, 筑摩書房, 1976, に「洛外図」のカラー図版が見られる。
- (23) 下鴨神社付近にその頃林が存在したことは「洛陽名所集」などの文献にも見られる。また, 「洛外図」の下鴨付近に見える林相は, 下鴨神社の境内を描いた寛文古図(下鴨神社蔵)のそれともよく似ている。
- (24) 西山恵子, 京の人口, 歴史公論No.85, 雄山閣, 1982, p 91
- (25) 拙稿, 名所図会に見た江戸後期の京都周辺林, 京都芸術短期大学紀要「瓜生」第5号, 1983, p 18~40

(京都精華大学)